

三ノ十、沙門觀俊笠置寺念仏道場塔婆寄進状

出典 弥勒如来感応抄（東大寺蔵）

解説 本尊を安置するため三尺蒔絵宝篋印塔を造り、七寸白檀弥勒菩薩一躰を安置して養和二年以降行われている不断の念仏に資するための寄進状。

原文

笠置寺念仏道場欲安置塔婆事

三尺蒔絵宝篋印塔一基

蒔絵化仏
数千躰

七寸白檀弥勒菩薩像一躰

塔内安
置之

宝篋印塔婆者功德殊勝十方諸仏恒集其内又弥勒菩薩光

明之中無量諸仏变身現通今存彼両事内安白檀之尊像外

繪黄金之化仏而已

三箇日不断念仏

毎年三月自十二日勤修之養和以後七箇年間敢不退転永契慈尊之

出世耳

造塔勸進志趣事

右弥勒菩薩者积尊之補処当來之導師也經説云釈迦遺法在家出家持戒破戒之人皆付属弥勒令得解脱云々又弥勒菩薩告詮明法師曰我得釈迦大師要契付属不念我者尚不捨之況有念願哉云々師資之語機縁有馮者歟然則設雖仰餘仏之誓願猶不可捨弥勒之引撰設雖望他方之浄土争不詣龍華之大会況於別願之人乎爰笠置寺者慈尊利生之靈地也化人刻仏像道俗凝信心志三會之人尤可結善縁於此処仍去養和二年勸進知識每年始行不退之念仏運歩助功之者朝野遠近不知幾千万矣互誓願云善友難遇宿願無朽彼四聖之先縁千仏之往事皆其類也願此中若雖一人先入仏道者其人必可導餘人此中若雖一人赴惡縁者餘人必將救其人以誠諦詞啓白仏前自其以來勸修年々盛永期龍華会但行道中台未安本尊其所闕此一事耳但重発造塔造仏之願念夫滅罪生善增福延命塔婆利益不可思議也經曰若人造如菴菓之小塔安等麦子之仏像又有人一四天下諸草木悉為人令其得声聞縁覺道果種々供養及造百千億大莊嚴殿施四方僧二人之中先人功德百千万億云々禽獸人虫纔見其形纔触其風皆得解脱況於信敬造供之輩哉

仏子不顧微力輒企大功蓋為令善人得小因大果也造功之用
大略具之貧道之所不及沙金之儲而已乞也諸檀那雖一分雖
一鉢隨力可施與昔一長者持一金錢供養塔婆依其善根常生
天上人間自兩手中出金錢無有窮尽遂遇如来証得道果今日
之事寧異彼乎造此塔則造十方之仏身也助此善則印三會之
解脱也仰願有識君子莫賤愚情矣

文治四年六月 日

沙門 觀俊

読み下し文

笠置寺念仏道場に塔婆を安置せんと欲するの事

三尺蒔絵宝篋印塔（注一）一基。蒔絵化仏数千軀、七寸白檀弥勒菩薩像一軀。塔内に之を安置す

宝篋印塔婆は功德殊勝にして十方の諸仏、恒に其の内に集い、又弥勒菩薩光明の中に無量の諸仏に身を変じて現われ通う。

今彼の両事を存し、内に白檀の尊像を安んじ、外に黄金の化仏を絵く。

三箇日不断の念仏。

毎年三月十二日より之を勤修す。養和以後七箇年間敢えて退転（中断）せず、永く慈尊の出世を契るのみ。

造塔勸進志趣の事。

右、弥勒菩薩は釈尊の補処にして当来（未来）の導師也。經に説きて云く。釈迦の遺法に、在家出家、持戒破戒の人、皆弥勒に付属して解脱を得せしむと云々。又弥勒菩薩、詮明法師に告げて曰く、我、釈迦大師より要契の付属（言いつけること）を得たり。我を念ぜぬ者も尚、之を捨てず。況や念願有るに於いておやと云々（注二）。師資（師匠と弟子）の語、機縁（きっかけ）の馮り（よりどころ）有るものか。

然れば則ち、設へ余の仏の誓願を仰ぐと雖も猶弥勒の引摺（引き合わせ）を捨てるべからず。設へ他方の浄土を望むと雖も争龍華の大会に詣でずや。況んや別願の人に於いておや。爰に笠置寺は慈尊利生の靈地也。化人仏像を刻し、道俗信心を凝らす。三会を志す人、尤も善縁を此の処に結ぶべし。

仍つて去る養和二年、知識（仏道の先輩）を勸進し、毎年不退の念仏を始行す。歩を運び功を助ける者、朝野遠近幾千万なるかを知らず。

互いに誓願して云うに、「善友遇い難く宿願朽ちることなし。彼の四聖の先縁、千仏の往事、皆其の類也。願くは此の中、もし一人と雖も先ず仏道に入らば、其の人必ず余人を導

くべし。此の中、もし一人と雖も悪縁に赴かば、余人必ず將に其の人を救はん」と。誠をもつて詞を諦にし仏前に啓白す。

其れ以来、勸修年々盛んにして永く龍華会を期す。但し、行道中、台未だ本尊を安んぜず、其の所此の一事に闕けるのみ。但重ねて造塔造仏の願念を發す。夫れ滅罪生善増福延命の塔婆の利益は不可思議也。

經に曰く、若し人、菴菓(果樹の名、マンゴー)の如くの小塔を造り、妻子に等しき仏像を安んじ、又人有りて、一四天下(須弥山の四方にあるといわれる四つの大陸)の諸の草木悉くを人と為し、其れに声聞縁覺(さとりを得ようとする人)をして種々供養して道果(修行の結果の悟り)を得せしめ、及び百千億大莊嚴殿を造り、四方の僧二人の中に施すことあらば、先人の功德百千万億と云々。禽獸人虫も纔に其の形を見、纔に其の風に触れば皆解脱を得る。況や信敬造供の輩に於いておや。

仏子微力を顧みず、輒(とりもおさず)大功を企つ。蓋し善人をして、小因大果を得せしめんが為也。造功の用、大略之に具るなり。貧道(拙僧)の及ばざる所は沙金の儲(たくわえ)のみ。

乞う、諸の檀那一分と雖も、一鉢と雖も、力に随い施与すべし。昔一長者、一金錢を持ちし、塔婆を供養し、其の善根に依り常に天上に生ず。人間両手の中より金錢を出すに窮尽(極め尽くすこと)有ること無く、遂に如来の証得道果(共に悟り)に遇う。今日の事寧ろ彼と異なる乎。此の塔を造るは則ち十方の仏身を造ること也。此の善を助くるは則ち三会の解脱を印すること也。仰ぎ願はくは有識の君子愚情を賤しむる莫かれ。

文治四年(一一八八年)六月 日

沙門 觀俊

(注一) もとは宝篋印陀羅尼を込めておく塔、我が国では石塔婆の形式の名称、ただし石造りとなるのは鎌倉以降である。

(注二) 註明(九二六―一〇一一年)、中国五代から宋時代の僧。註明は三寸の弥勒像を刻まんと發願し、兜率天に上生することを祈誓したところ、夢にその像が大きくなり、金色の光明を放った。そしてその弥勒像は「我我はすでに釈迦から大衆を救うべしとの依頼を受けている。それ故我を念じざる者も捨てる事はない。まして我にすがりたいと念じる者を捨てることがあるか」と言葉を發したという(竹山法明寺弥勒宗兜率聖賢伝)。

宗性弥勒如来感応抄第一にも「慈尊自告釈註明云、我得釈迦大師要契付属、不念我者尚不捨之、況有念願乎」とある。